



Title	BSE問題の背景と酪農、酪農における生産経済と農業生産の違い(2002年度秋季大会シンポジウム「北海道酪農の現段階」)
Author(s)	三友, 盛行
Citation	北海道農業経済研究, 12(1), 42-46
Issue Date	2005-03-10
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/63539">http://hdl.handle.net/2115/63539</a>
Type	article
File Information	KJ00006912253.pdf



[Instructions for use](#)

[ 報 告 ] 2002 年度秋季大会シンポジウム

## BSE 問題の背景と酪農、酪農における生産経済と農業生産の違い

三 友 盛 行\*

### I. はじめに

ただいま紹介を受けました中標津で酪農を行っている三友です。よろしくお願ひします。今日は農業経済の学会ということですから、酪農の現場からの出席は多分僕一人ということでしょう。研究ということは全く分かりませんので、日々酪農を営みながら現場を通して、感じてきたことを研究のことではなくて現場の感覚として報告をさせていただきますが、まず僕がここに立っているということの意味合いをお話したいと思います。できたらこういう学会に生産現場の人間が立たない時代の幸せというのを味わいたいものだと思います。逆に言えばこういう学会に生産現場の人間が来るということは、21世紀の今日の酪農段階の混乱を表しているのだと思います。

もう一つは僕の酪農は、マイペース酪農と呼ばれていますが、循環型の土や草を大事にする酪農を現場で細々と実践をしてきて10年くらい前に出たときには、ずいぶん変わった形態だといわれてきました。しかし、今21世紀になって昨年のBSEの問題も含めて改めて時代がスポットを当ててくれています。僕はいつも思うのですが、たまたまトップランナーをテレビで映してたら、周

回遅れのランナーが映ってしまったという見方をすればトップランナーに見られるということだと思ひます。

しかし、僕はすぐに抜かれるだろうと思ひます。周回遅れの2周目というのがまたありまして、2周目で今スポットを浴びて、後でお話しますが、BSEの問題は今風化しつつありますから、原因が特定されないほうがいいのではないかと、見方も全くないわけではなく、風化をしてじきにテレビ番組などから映らなくなる。それを10年ごとに繰返して、2050年までに周回遅れのトップランナーを、5周遅れをひっぱりだしても時代は遅い。今日、周回遅れのランナーにスポットを当てた以上は是非検討・研究の対象にしていただければ嬉しいと思ひています。

与えられた課題は2つあります。一つは、BSEの問題です。それからもう一つの問題は酪農の生産現場として、経済的な生産体系と農的な生産体系の2つがあり、今後どのように経済的に評価をしていくかという2点についてお話をしたいと思ひます。

### 2. BSE の背景と酪農

1点目のBSEの問題にですが、僕を含めて多くの酪農家はBSEが出たときも、肉骨粉と言う

\*酪農家(中標津町在住)

問題が出るまで、実を言うとこの言葉を知りませんでした。肉骨粉由来、狂牛病、BSE など改めてそういう多くの情報が出て、勉強をし直して肉骨粉というのがあるのだと、非常に効率のいい安価なたんぱく質の供給源があることを理解したわけです。農水の最大の失政といわれるように使用禁止ではなく通達という状況の中で、通達はしたけれども実際にはかなりの部分で入ってきて、それが使われていたということだと思のです。ところが冷静に考えてみれば当たり前の話だと思のです。

それは、乳価の問題と大きく結びついております。集約酪農地域、あるいは酪農振興法が昭和29年にできました。酪農の集約地帯の指定があってパイロットファーム等々もできましたし、その時は国費をもって北海道の酪農を育てようということがあったと思います。そして不足払い法があって酪農が安定化をしてきたと同時に、日本の国が経済的な発展の中で消費者からより安いもの、常に外国の価格と比較されながら外国のものに負けないようなコストということが求められるという生産方式の中で、結果として乳価が下がってきた。この下がっていく乳価をどうやって支えるか、経営を支えるかということになれば増産です。

増産をするとまたその効果で乳価が下がる。乳価が下がったら増産、増産するから乳価が下がるということで、酪農家はできるだけ安い効率のいい餌を求める。餌会社も安くて栄養価の高いものを供給しなければ競争に残れませんから結果として、肉骨粉を出さざるを得ない状況に追い込まれたということなのだろうと思います。BSE だけが非常に大きく取り上げられましたけれども、ここに書いてありましたように BSE が入ってくる必然性をそれぞれの関係機関が作ってしまったということだと思のです。

その前に口蹄疫もありましたし、BSE がありました。僕は BSE の発症事例というのは非常に

確率が低いことからすると、寧ろ僕は間接的なのですけれども穀物多給による問題の方がはるかに大きいと考えます。これには牛に対する部分、そして生産病が多発をすると同時にその対策として抗生物質をたくさん使う、牛は不健康、その不健康な牛からたくさん搾られた牛乳を飲むことによる消費者の健康の問題の発生など一連の問題が含まれている。一気に症状が出るわけではなく非常に長い期間の中で徐々に影響が出ますから、皆さん方の経済至上主義からいくと無視をしている、単に無視をしているだけであって（BSE の場合は無視はできなかったというだけで）、そういう部分からいけば今日の酪農の生産体系のほうははるかに怖い。そして 850 万トンの牛乳を支えている大部分の、内地を含むと大部分は輸入の穀物と、そして乾草です。

この乾草も非常に怖いものがあって、アメリカが使っている乾草と輸出するための乾草は全く出来が違いますから、このことについては別途詳しく研究されたほうがいいと思いますが、もっと言えばポストハーベストも非常に怖い。人間の食べている輸入小麦の怖さというものを知れば、想像がつくわけですが、同時に草由来の牛乳と穀物由来の牛乳の質と機能の違いというのがあります。

私の家ではチーズを作っていますが、チーズを作ると牛乳の機能というものがはっきりと分かる。もっと言えば青草で搾った牛乳、乾草で搾った牛乳、穀物由来の牛乳は全く違います。一番いいのは健康な牛の牛乳です。健康な牛というのは大体搾乳量 4000 キロから 5000 キロ位が健康な牛であって、10000 キロも出るような牛乳はただ色が白というだけのものです。例えば和牛のさしの入った肉は美味しいというが、さしを入れるためにはビタミン欠乏にして輸入穀物を多給します。それは健康な牛ではありません。不健康な牛からできた肉が健康な体を支えるなんてことはありません。そういうことからいくと青草から搾った牛乳は非

常に元気がいいです。乳酸に対する働きがよくて、おおわらわするぐらい反応がいい。ところが乾草になるとおとなしくなる。穀物由来の牛乳の脂肪は酸化が早くて長持ちしない。そういう生きていない牛乳という部分について言えば、今消費者は「安心安全」という話をしてしていますが、次の段階としては機能の問題、食物というのは体を支えるわけでありますから、当然健康な牛、土、草からできたものを食することを志向すると思います。そして健康な体を支えるというところまで消費者はきっと意識を高めてくると思います。そのときにきちんと対応できるような生産体系というのが望まれるという訳です。

次に酪農に起因する BSE の問題について述べます。非常に経済的な打撃があったわけですが、ただ実際は酪農家より直接的な原因ではない畜産農家が大きな打撃を受けてしまったということです。それで、4 万円対策だとか初生の雌を 3 か月以上抱えれば 3 万円出るという僕には全く理解できない事業を農協団体は政府に対して要求して、それを成果として謳っています。

生産者の被害者意識だけが残り、酪農生産現場に対しては反省もなく、今風評もおさまりつつありますし、一面では風化が進んでいるということです。ここ 1 年間酪農団体が指摘したところは、安心安全、牛肉の消費拡大という部分では努力はしてきましたが、生産現場のあり方あるいは BSE を生産現場に閉じ込めてしまったということの反省にたつての信頼性の回復ということは何らしていません。そのことをメッセージとして消費者に全く伝えていない、ただ黙って下を向いているというだけです。

現場では今非常に乳質改善が進んでおりまして、生乳 1 ml 中の体細胞数が 50 万以上の牛乳を出荷したものは即停止、そしてその停止期間が解けるまでにいろいろな方法をそれぞれの関係機関が対応しています。衛生的な生乳の品質の確保等々が

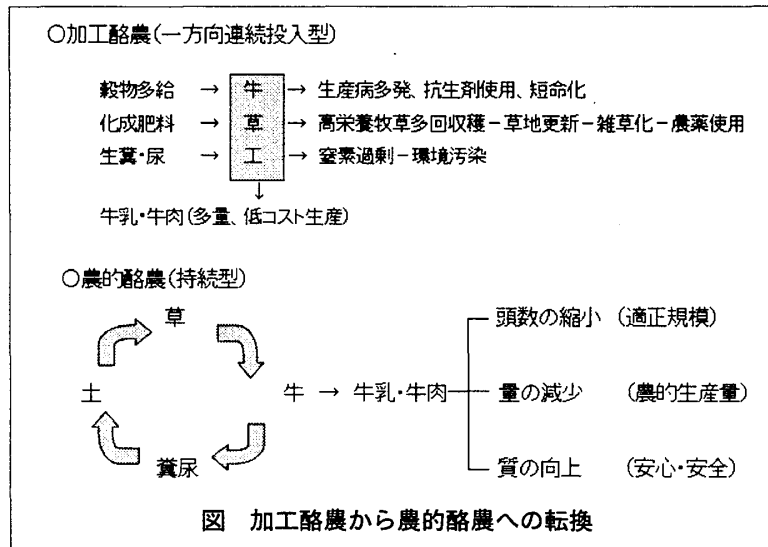
消費者に対する信頼の回復というように実行されています。私は考え方が違うのではないかと思います。そういうことで生産現場に対する締め付けが別な部分で厳しくなったということをご報告したいと思っています。

とりあえず BSE は落ち着いております。メガファームを目指している訳ではありませんが、根室管内の 500 トン平均、一部の農協では 600 トン 700 トン平均の酪農現場がどんどんできています。拡大をすることによってこの BSE 問題あるいは消費者に対する「安心安全」を効率よい牛乳の生産によって補うということですが、これは消費者が求めている「安心安全」と生産者が行っている部分が全く別な方向に走り出しているのではないかとこのことを昨今私はつよく感じています。

### 3. 生産経済と農業経済の違い

実は今日は以下のことがいいたくて参りました。すなわち、今日の酪農は、乳価の引き下げのもと量を追求する過程で、「規模拡大」し「加工業化」をしてきたということです。草地在りが増えるわけではなく、草が増えるのよりも遥かに加速度的に生産量が増えてきた。これは加工業そのものであります。そしてその加工業を支えているものが、先ほどお話しましたように輸入穀物の大量の給与です。穀物の多量給与というのは経済面と生産面との効率の二つがある。

電話をしたら持って来てくれて、牛の前にやったら牛は自主的に食べてくれて、結果として多くの牛乳を出してくれる。これは生産効率です。もう一つは、今は大体 1kg 当たり 37.8 円から 40 円の配合飼料でありますけれども、その配合飼料を食べさせると 2 キロの牛乳が増えるというのが基本的な流れです。今平均乳価は生乳 1kg 当たり 75 円でありますから、1 キロ 38 円の穀物を食べさせると 75 円×2 キロの 150 円の牛乳が増えるわけでありまして、これは経済効果で 4 倍位



ある。経済効率と生産効率とにとって非常にいいシステムである。

生産現場からするとこのいいシステムの影に見えない部分に非常に大きなお金がかかるわけで、それは牛の生産病による短命、機械施設の再投資、労働の過重という全く見えない部分を補うために多くのお金と労力がかかって、結果としてコストを下げるができない。午前中の報告もでスケールメリットの話がありましたが、日本の酪農は規模拡大してスケールメリットが合う訳がない。現場を経済学的に見るとスケールメリットは大きく出ますが、生産現場からすると儲からないから沢山搾るしかないわけです。それは1キロ1円しか儲からなくても1000トン搾ればボリュームがあるわけで、本来はスケールがメリットを呼ぶわけですが、生産現場は単なるボリュームで経営と生活をしていこうとする。

その時に犠牲となるのがまず人間です。ご承知のように常に規模拡大・頭数増大をしていく現況からしたらやはり労働、そして牛、土、草に大きなしわ寄せを加えてしまうということです。

そのためにこれからどうしたらいいのかということですが、消費者もBSEを機にして、あるいは不当表示、制度の悪用等を通して、非常に食品に対する消費者の信頼を失いました。これから消

費者が求めだすことは当然安心と安全であります。ところが安心と安全と信頼は全く違うものであります。いくら私が安全だと言っても信頼をされなければ、相互関係が成り立たないわけでありまして。安心だ、安全だと言うのは易しいのだけれども、信頼を得ることは非常に難しいと思います。

今までの効率化で求めることでは信頼を得ることは出来ないであろう。だとすると生産現場として今までのやり方に対する反省と、そしてその公開が必要です。遑れば誰が作ったかわからないでは「安全安心」を信頼と結びつけることは出来ない。それは生産現場の公開だろうと思う。もっと言えば生産方式をどう公開するか、どういう過程でこういう物ができたということを引きちっと公開できるかということです。

それではどのようにするかということです。図に示しましたように、今までの加工農業・加工酪農、加工酪農というのは穀物・化成肥料・生糞等を大量投与するということですが、この加工酪農を別な視点で一言でいうと「目標としての酪農」です。もっと言えば「経済としての酪農」です。

次に農的酪農、括弧して「持続型」ともしていますが、これは「結果としての酪農」であると思っています。

次に経済のくびきから解放された酪農というこ

とです。今日のテーマは農業を農業経済のくびきから解き放つかということで、そして解き放した結果について初めて安心と安全と信頼性が回復できるということをお話したいと思います。この農的酪農をすると、土・草は牛、牛は牛乳と牛肉を生産すると同時に糞尿を生産する。そして、この農的酪農を実践すると結果として頭数が縮小する、量が減少する、結果として質が向上する。

問題はこの量の減少であります。この量の減少をどうするかということですが、量が減少すると規模拡大を推し進めてきた時は農家のボリュームが大きくなることで、周辺産業を潤す、結果として農業経済が成り立ってきているわけであるが、量の減少あるいは持続型というのは再投資が少ないということでもありますから、農業経済のボリュームが縮小するというわけでもあります。この農業経済が縮小すること、あるいは生産量が縮小すること、あるいは生産量が縮小することをどうやって受け容れていくかということが今後の大きな課題なのだと思います。先ほど「結果としての酪農」の話をしましたけれど、我々は常に目標を持つあるいは持たされて目標を達成するために色々な手段・方法を講じて量を達成します。そのことが不正表示活動あるいは肉骨粉までを抱え込む体制を作りあげてしまった。農的なものというのはやはり適当な草地、あるいは適正な牛の配置をして適正な量を搾る。それは農業というのは土、草、牛の持っている自然力をどうやって人間が手を添えて、人間の食べられない草を人間の健康を支える牛乳・牛肉に変えていくかという農的な生産です。

我々は農的生産を忘れて工的生産に一生懸命励んでいる。そのことによって現実になる農業経済があって、それに従って牛乳・牛肉の生産をしてきた結果として、BSEを抱え込んでしまった。その時農的にそれぞれの持っている自然力をどうやって伸ばすかと、そしてその自然力が最大限に伸ばしたものの形態あるいは生産物をどうやって評

価するかという全く別な視点がある。

この評価が生産現場で生産を継続持続することの出来ない評価、あるいは消費者がその評価をすると、家計負担が出来ない評価になってしまう。この辺をどうやって整理するかということが農業経済の大きな課題であると思う。国際価格があって安いものを作るということが先あって、それに従っていく様な生産体系が今日を招いた。

ですから例えば生産現場が100円ほしい、流通加工が160円、180円、そして消費者段階で200円だと。そしてそこにいくと消費者は180円がいいという。しかし、自然な流れからいくと200円になる。この20円の差を生産量の拡大とコストの低減という無理無駄の生まれるような体系で解決するのではなく、この20円をどうやってそれぞれが合意の上で負担をするか。この20円はどうして負担をするかということ、この20円をコストで解決すると2050年の僕の孫が僕と同じ年になるわけでありましてけれども、2050年あるいは2100年の子供たちが使う権利がある資源を奪ってしまって20円のコストを下げることになってしまう。

今、20円のコストを下げるのは2050年あるいは2100年の飢える世代を作るだけの話です。そういうことですので、農的な姿を素直に将来につながる形で伸ばしていただきたい。

そのことに対して皆さんが色々な議論をして、評価あるいは経済的な評価を与えて、支えきれなかったものについてはそれぞれの段階あるいは公的にそれぞれが負担をする。その時に質と量と安心と安全とそして消費者の信頼が回復するのだらうと思います。ですから私が今お話した課題に対して農業経済学会が研究と検討をして、私の孫が2050年になったとき、あの時釧路で皆さんがいいお話をしてくれたお陰でいい人生を迎えることが出来たと言える様な未来を念頭に置きながら、今後研究と検討を加えていただければ幸いです。